

先人の知恵から

2

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

最近、北海道も温暖化が進み、夏の暑さも厳しくなってきた。東京では百数十年ぶりに一日中 30 度以上と言う日があった。二酸化炭素などの排出ガスの増加、人口の増加、森の減少等温暖化の原因は複合的だ。「今さえよければ、自分さえよければ良い」では地球の温暖化は防げないし、その結果子孫の繁栄は望めない。どこかで諦めてしまう前に、先を見据えた取り組みを始めなければならない時に来たと言えよう。

先日テレビで二酸化炭素を人工光合成により有機物に変換させる装置を作った女性研究者の話を見た。この装置の変換効率が上がれば、温暖化の防止に大きな効果が期待できる。この女性の言葉が「『出来たらいいな』を『出来る』に変える」であった。それを聞いて、「為せば成る、為さねば為らぬ何事も、為らぬは人の為さぬなりけり」を思い浮かべた。

やる前から諦めてしまう人に考えてもらいたい。そんな言葉も含め、いくつか選ん

でみた。

今回もあ行から次の7つ。

- 朝寝坊に成功者なし
- あした こうがん 朝に紅顔ありて夕べに白骨となる
- あした 明日は明日の風が吹く
- 足の跡はつかぬが筆の跡は残る
- 足を削りて履くつに適てきせしむ
- 当たって砕くだける
- 頭え剃るより心を割れ

<朝寝坊に成功者なし>

「朝寝坊をするような怠け者はいずれ貧乏になり生活に困る」との意。「朝寝朝酒は貧乏のもと」も同様。

不登校の生徒の中には、朝が苦手なが多い。朝「目は覚めているけど体が動かない」と言って、ずっと布団に入っている。母親が何度起こしても起きない。一方で何か楽

しいことがあるとさっさと起きて出かける。そんな子どもたちを見ているとこの言葉を言いたくなる。

学校に行く事が楽しい子もいるが、そうでない子も沢山いる。楽しくないから行かないと言う選択が許されるようになった(?)のは最近の話だ。お腹が痛い、頭が痛い、吐き気がする、教室が嫌、嫌な子がいる、嫌な先生がいる。理由はなんとでもなる。いじめ等で本当に行けなくなっている子はともかく、「不登校」がこれだけ一般的になって、各クラスに数名は不登校の生徒がいるような時代では、ちょっとしたことで不登校になれる。

不登校児に対し、『頑張れ』が禁句になって久しいが、本当にそれで良いのかと迷う日々。「裕福に暮らしたい」、「楽しく暮らしたい」と思っている今時の子ども達のためにも、「朝寝して居る様では将来楽な暮らしは望めないよ。」とはっきり伝えたい。

一方で保護者もシフト勤務などで朝起きられないケースに出会う。子どもが学校に行くのを見送ってから寝る人もいる一方、子どもが一人で起きて用意をし、忘れ物をしたり、衣服も同じものを続けて着ていくなどの状況に気付かない人もいる。朝ごはんはパンでも用意してあれば良い方で、何も食べずに登校する子もいる。子どもが自立的になると言う意味ではプラス面も少しはあるだろうが、保護者として、子どもへの責任の果たし方はこれで良いのだろうか。朝子どもと向き合えない分、夜ゆっくり向き合っていれば良いが、それも無い保護者もいる。こういう家では子ども中心ではない。精神疾患を抱えた保護者もいるので一概には言えないが、もう少し子ども中心で

対処できないものかと思う。

例え昼寝をしたとしても、学校がある日の朝は子どもを見送れる時間に起きられないか。保護者が面倒くさがっていれば、子どもも面倒くさがってしまうだろう。その結果不登校になったとしても「なるべくしてなった」ということになる。一生続くわけではないので、せめて小学校卒業までは朝出来るだけ見送ってほしいと思う。

<朝に紅顔ありて夕べに白骨となる>

和漢朗詠集(注1)の藤原義孝(注2)の詩の一節からとられたものだが、浄土真宗の僧侶がこの一節をよく使ったことから広まった。朝健康そうな顔をした若者が、夕方には急に死んでしまうこと。

人の生命は短くはかない、生死の予測は出来ないことから世の無常を説いている。

男女の平均寿命が80年を超え日本は世界一の長寿国になった。医学も発展しIPS細胞も出来て、臓器の入れ替えも近未来には可能になりそうな時代だ。長く生きられると言う思いが一般的になっているが、明日の事は分からない。

明日自分が死ぬことになっても悔いの無い生き方をして行きたいと思う。

<明日は明日の風が吹く>

先の事を心配せず、成行きに任せて生きようということ。無駄な取り越し苦労はせず、その時になってから心配しても遅くな

い。前からくよくよしてもどうにもならないこともある。「明日の事は明日案じよ」とも言う。

特に不安の強い母親や子どもたちでは先々の事ばかり心配し、しかもネガティブな想像の中で不安を大きくしている。まだ1歳にもならない子どもの大学まで考えている保護者がいる。子どもが一日学校に行かなかただけで、不登校の心配どころか、引きこもりになって、親の年金をあてにして暮らすようになるのではと心配している保護者がいる。ちょっと友達と言い合いしただけで絶対に許してくれないと思い、学校に行けなくなる子どもがいる。テストで100点じゃなかったから、自分は駄目だと思ひ込み翌日のテストを受けられない生徒がいる。こうした母親や子どもたちにこそ、この言葉を贈りたい。

今日が悪い日だった時、明日はきっと今日より良い風が吹くと思えば、本当に良い風が吹くものだ。

英語では Tomorrow is another day.
(明日という日もある。)

<足の跡はつかぬが筆の跡は残る>

「足跡はすぐ消えるが筆跡はいつまでも残るから、文字は気を付けて書かねばならない」の意。

今で言えば、「メールでのやり取り、ラインの書き込みは慎重に」ということになるか。

ラインの書き込みが殺人事件の全容をつかむ情報になったケースがあった。その時のラインの内容を見ると只の口喧嘩なのに、

そのまま殺人事件に発展するとは驚くばかりである。

あの事件でなくても、ラインの書き込みで友人関係に亀裂が入る事例のなんと多い事か。書きこんでしまったものは消してももう元には戻らない。メールの利点は送る前に読み直す事が出来、話し言葉よりは冷静に検討できることだろう。しかし、感情のままにメールするのであれば、そのまま面と向かって、話し合うか喧嘩した方がずっと良い。

子どもたちの世界だけではなく、大人も同じようなことをしている。

ブログやプロフ、個々のホームページなど、個人情報がダダ漏れの状態であってもその危険性について十分に検討していない。そのような中で個人の中傷、曖昧な情報や根拠のない情報を不特定多数に流した弊害について、あちこちで警告を流していながら、未だに改善されない。

正しい情報かどうかを見極める力を持たないならば、こうしたメディアに触れるのはとてつもなく危険なことになる。

1歳の子どものおむつが取れないと相談に来た母親がいた。彼女はこうしたメディアで「1歳の子のおむつが取れた」という情報を読んで、それが一般的なものだと思ひ、自分の子どもの発達が遅れていると心配したのだ。相談に来てくれたから修正が出来たが、もしそう思ひ込んでいて、自分の子どもがいつまでもおむつが外れないとイライラして、叩いたりするようになったらと思うと本当に怖い。

もう少し自分の発する言葉に対し、責任を持って、メールやライン、ブログに書き込みをすべきだ。そして、閲覧者は、根拠

のあるデータなのか、偏った情報源ばかり見ていないかを、自分で判断しなければならぬ。

テレビで〇〇ダイエットや××健康法の話が流れば翌日のスーパーマーケットのメイン商品はその〇〇や××になるのを見聞きした方は多いと思う。実際〇〇や××を買った人も周囲に一人や二人ではないだろう。メディアの影響とは恐ろしいものだ。他人の行動をコントロールしてしまう。ラインにも同様の力があると思う。

小学生からスマホを活用している今の時代だからこそ警鐘を鳴らそう。そして、出来れば、小中学生など、人を傷つけるかどうか、又正しい情報かどうかの判断が未熟な子ども達には、メールやブログ、ラインでのやり取りを制限したいものだ。

<足を削りて履に適せしむ>

出典は淮南子(注3)。物事の本末を取り違えていることの例え。靴を足に合わせるはずが、足を靴に合わせて削ること。

いつの時代でも親は子どもに様々な期待をかけるものであるが、子どもの能力・可能性を理解せずに親の希望に合わせようとするケースを多く見かける。

ある女子高生は3歳からピアノを習わされていた。母親はこの子が小学生の時にグランドピアノを買い与えた。家は公営住宅で、ピアノが一部屋を占領することになった。彼女は母親に言われるがまま頑張って練習し、ある程度のところまでは行ったが、それ以上は感性の問題や技術の問題もあって進まない。彼女の心は高校に入っ

ポキッと折れた。母親の期待に添おうとして頑張ってきて、思春期に心が折れる典型的なパターンである。

これは医者や教員の子どもなどによくみられる。本人の能力や得意分野、可能性を無視して、「〇〇にならねばならない」を押し付ける保護者から、子どもを守るのも我々支援者の務めだ。

また、よく講演会などで「トンビは鷹を生まない」と話すことがあるが、この言葉の意味を保護者が理解していれば、子どもに無用のプレッシャーをかけることは減るだろう。

ある女子大生は、中高一貫の私学に入り6年間医者になろうと頑張った。周りでチャラチャラと遊んでいる子たちをしり目に勉強一筋で、友人関係も希薄な中、孤独に過ごした6年間。結果が良ければそれも報われただろうが、行きたい学校には行けず、医者の夢も露と消えた。周りでチャラチャラしていた子が結局彼女より良い結果を残していた。彼女は今就職を前にして、中高の6年間を否定し続けていた。浪人すれば良いと言う人もいるだろうが、彼女にはそれは許されなかった。何故医者になろうと思ったのか。そこには絶対的権力を持つ親の、命令に近い思いがあった。彼女は一生懸命親の思いに添おうとしたのだ。

昔、纏足てんそくと言う風習が中国にあった。小さい足が好まれる時代は、中国ばかりではなくヨーロッパにも見られた。女性が大きな足をしているのは美しくないと言われており、冷たい水に足を漬け、ワザと小さめの靴に足を合わせたりしていた。

靴のサイズも十分そろっている時代である。自分の好みとサイズに合った靴を選ぶ

ように、自分の人生も自分に合ったものになるよう自ら切り開いていってほしい。そして親はそれを見守り、陰ながら支えていければ一番であろう。

<当たって砕けろ>

成功するかどうかかわからないが、とにかく思い切って決行せよと言う事。極めて困難な状況を打開するための決意をうながす言葉。

相談業務で出会う人は、「どうしたらよいのか分からない」とほとんどの人が言う。正直「どうしたら本当に良い結果につながるのか」は誰にもわからないのが現実である。現状維持は少なくとも今のままか今より悪くなることもあるので、ほんの少しの変化が、もしかしたら今より少し良く思える日常に繋がればよいだろう。

我々支援者は、そんなことを思いながら、相談者と共に今のやり方と異なる何かを探し、考える。しかしそれを実行してもらうことはある意味「当たって砕けろ」状態である。

くよくよ考えていても時間ばかりが経って変化は起きない。熟慮することは大事だが、決断と実行も大事である。当たって砕け散ることもあるが、それも人生。「失敗は成功の基」とも言うではないか！

英語では Take a risk! (リスクを負え！危険を冒せ！) というところか。

<頭剃るより心を剃れ>

外見より精神の方が大事であると言う事。形式主義への戒め。六道講式(注4)に「たまたま頭を剃って心を剃らず、衣を染めて心を染めず、恥じ恥すべし」とある。又、鴨長明が「そりたきは心の中の乱れ髪、つむりの髪はとにもかくにも」と詠んでいる。

英語では Cowl does not make the monk. (僧衣が修道僧を作るのではない。)

世の中、「見た目はとても素敵なのに、性格が・・・」と言われる人がいる。反対に「洋服にシミが付いていたりしても平気だけど、性格や言動は素晴らしい」と言う人がいる。どちらが良いかと言えば後者だろう。

昔から外見だけ立派な人の本来の姿が分かった時に「化けの皮が剥がれた」とか「メッキが剥げた」などと言ったものだ。内実伴わない場合はどこかで化けの皮が剥がれる。どんなに着飾っても、内面的なものはカバーしきれない。心を磨いて行けば、心の美しさが外見にも影響を及ぼしていく。どうも外見にばかり囚われがちなように思われる昨今だが、どうすれば心を磨けるのか？

一つには、他人との比較にばかり気を取られないようにすることではないか。

昔から他人と同じような服装やファッションをする人がいるが、最近、情報が多きことと経済格差が少なくなったことから流行を追いやすくなり、個性が感じられにくくなった。もちろんファッション等には流行があり、流行を重んじる傾向は、今も昔も変わらない。しかし最近の様子は、流行を重んじると言うより、「周りと同じようにしている＝流行を追っている＝標準・良い」という考え方があるのではと思える。

「流行を追っていない＝標準以下」と言う強迫観念があり、日本人の集団意識の強さがその思いに拍車をかけ、ますます標準外を良く思わない傾向があるように感じる。しかし、それが自分自身に合っているかどうかの検討はしているのだろうか？

皆が同じだと安心する。しかし人には個性があるので全く同じにはならない。だから他人と違う事を気に病まず、それを「才能」として生かしていけば良いのではないか？時には流行に逆らってみれば、自分が流行を生み出す側になるかも知れない。他人との比較を気にしないと言うことは即ち自分に自信を持つと言うことだろう。

もう一つは、優しさを身に付けると言うことではないか。優しい気持ち、それは憐れみとか同情とかではなく、穏やかで暖かい気持ちである。そういう気持ちになれるのは自分自身を認められ、自分がそれなりに恵まれている、幸せであると感じられるところから始まると思う。恵まれていると言う意味は、金銭的なことではなく、心が豊かであるということである。欲得で物事を捉えたりせず、どんなことでもあるがままに受け止められる心のゆとりであろう。他人に対し優しい気持ちで接することが出来れば、他人はその人のことを心のきれいな人と感じるだろう。「心を剃る」とは、心をきれいにすることなのだと思う。

妬んだり、憎んだり、嫌ったりしないなどということは、聖人でもなければ出来ないと言うだろう。子どもには人を嫌う事も、憎むことも、妬むことも必要だ。万人を愛することなどでできない。この言葉は子どもに向けての言葉ではない。我々大人が、大人として意識すべきと説いているのだと思

う。

大人は子の鏡である。大人が広い心、優しい心でいられるなら、子どもたちが虐待されることも、理不尽なプレッシャーに潰れることも、心を病むこともないだろう。

この言葉は自分自身の戒めとしても常に心にとめておきたい。

今回はここまで。次回をお楽しみに。

注1 和漢朗詠集 ふじわらのきんとう 藤原公任撰の歌集。平安中期1018年ごろの成立。全2巻。藤原公任は百人一首にも選ばれている歌人。「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」

注2 藤原義孝 よしたか 平安時代中期の歌人。百人一首では「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひぬるかな」が選ばれている。

注3 淮南王劉安 わいなんおうちゅうあん (紀元前179-122)が学者を集めて編纂した思想書。老荘思想を中心に儒家・兵家・法家・墨家思想も取り入れた知の百科全書。諸子百家の一つの雑家の書物とされている。

注4 六道講式 六道とは生命が輪廻転生を繰り返す「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天」を指す。講式とは漢文の読み下しによる声明曲で、木魚などの楽器を使い、仏、菩薩、祖師などの徳を称えたり、実績を述べたりするもの。「我等適々(たまたま)頭(こうべ)を剃って心を剃らず。衣を染めて心を染めず。」とある。